

女強盜

菊池寛

青空文庫

隆房たかふさ大納言だいなごんが、けび檢非違使いし（警視庁と裁判所をかねたもの）の別当（長官）であつた時の話である。白川のある家に、強盜ごうとうが入つた。その家の家人けにんに、一人の勇壯ゆうそうな若者がいて、身支度をして飛出したが暗くてどちらが味方が敵かわからない。まごまごしているうちに、氣がついて見ると、味方はことごとく敗走して、自分一人が強盜の中にいる。しかも、強盜達は、自分を仲間の人だと思つて話しかけたりしている。今更いまさら、戦つて見たところで、とりこめられてたちまちやられそうである。そこで、覺悟かくごを

きめて、強盜の仲間のような顔をして、強盜について行き、盗品をわけるところへ行つて、強盜の顔を見定め住家もつきとめてやろうと云う氣になつた。それで、盗品の櫃ひつのなるべく軽いものを一つ背負つて、強盜について行つた。すると、朱雀門すざくもんの傍そばまで行くと、そこで盗品をわけ合つて、この男にも麻袋あさぶくろ一枚呉れた。その強盜の首領株と云うのは中肉中背の優美な男で年は二十四、五らしい。胴腹どうはらまき巻をして、左右の手にはこてをして長刀を持っている。直衣袴のうしぼかまの裾すそを緋ひの糸で、くくつたのをはいている。この男が、いろいろ指図さしずをしているが、他はまるで従者のように、素直に云うことをきいている。分配が終ると、皆みなそれぞれの方角に歩き出した。男は、この首領の後をつけてやろうと思ひ、十五、

六間も後から、気取られないように、そつと尾行びこうした。すると、朱雀を南の方へと、四条通まで行つた。四条通を東へ行つたが、そこまではハッキリ姿が見えたが四条大宮の大理（検非違使別当のことである）の家の西の門のところまで、ふと姿が見えなくなつた。つまり強盜のあとをつけていくと警視そうかん総監の官舎の裏門の所でふと見えなくなつたわけである。

二

男は、なおもそのあたりをかけめぐつて探したが、相手のかけはどこにもない。強盜の張本が、検非違使の官邸かんでいの中へ姿をか

くすなど、奇怪至極であると思つたが、深夜であるし、処置の方法がない。それで、仕方なく引き上げたが、あくる朝起き出ると、すぐに四條大宮へ行つて官邸の西の門あたりを調べて見た。すると、堀にかすかではあるが、血の痕がついている。昨夜の男が官邸にはいったに違ひないと思つて、家へ帰ると主人に詳しく報告した。すると、主人は検非違使の長官とは割合懇意であつたので、すぐ出向いてその事を長官に話した。長官は驚いて家の中を捜索した。すると、例の血痕が北の対（離れ座敷）の車宿（車を入れておく建物）にこぼれているのが分つた。北の対と云えば、官邸に使われている女中達の宿である。きくと、女中の誰かが強盜をかくしているに相違ないと云うので、女中を一々呼び

出した。すると、その中に大納言殿どのと云われる上席の女中がいたが、それが風邪かぜ気味ぎみだと云つて、出て来ない。それを、たとい人に負われてもよいから出て来いと云つたので、仕方なく出て来た。呼び出しておいてから、その局つぼねをさがして見ると、血のついた小袖そでが出て来た。怪あやしいと云うので、床板ゆかいたをめくつて見るとさまざまの物をかくしてあつた。訴人そにんの男の云う通り緋おの緒おでくくつた袴も、長刀も出て来た。その外に、一つの古い仮面が出て来た。その仮面をかぶつて男装だんそうして、指揮していたらしい。党類を責めとうたがどんなに、責められても白状しなかつた。長官は、自分が使っていた女中が強盗を働いていたのを謝罪する意味もあつたのであろう。白昼に、牢獄ろうごくへ護送した。たいへんな見物であ

つた。その頃の女はきぬかずきと云うおもておおい面被おもておおいをつける例であつたが、それをぬがせて、諸人に顔を見せた。二十七、八ばかりのほそやかな身体からだつき、髪かみなども美しいよい女であつた。

三

これも女強盜の話である。時代は分らない。ある失業した侍さむらい

(貴族に仕える男、後世の侍ではない)が、あつた。年は、三十ばかりで、背丈も高く、少し赤ひげであるが立派な男であつた。

ある日の夕暮ゆうぐれ、京の町を歩いていると、ある家の半はじとみ(小窓)から鼠鳴ねずなきをして(浅草の六区や玉の井の女が鼠鳴きして客

をよんだが、これは古代からのならわしである）手を指し出してその男をよんだ。男は近づいて（何か御用ですか）と云うと、

（ちよつと話したいのです。その戸は閉まっていますようですが、押せば開きます。どうぞ開けておはいり下さい）と、云った。男は、思いがけない事だと思つたが、とにかくはいると、女が迎え（その戸を閉めてから、お上り下さい）と、云つたので上つた。上ると、みすの中に引き入れた。昔は、一間の中にみすを垂れて、その中が女の居間であり、けいぼう 閨房であつた。さし向いになつて見ると、年は二十ばかりで、あいきよう 愛嬌があり美しい女である。この位美しい女に、ゆうわく 誘惑された以上、男として手を拱ねていることつくはないと思つたので、いっしょ 一緒に寝た。割合い広い家なのに、家人

は一人もいない。どうした家だろうと、最初は怪^{あや}しんだ、が、女と親しくなるにつれて、そんな事は気にならないで、日が暮れるのも忘れて寝ていた。夜になると、門を叩^{たた}く者がある。外に案内に出る者もないので、男が起き上って行って門を開いた。すると、侍らしい男が二人と、女^{にようぼう}房らしい女が一人、下女を一人連れ込んでいる。そして家にはいつて来ると、手分けをして、しとみ（雨戸のかわり）をおろしたり、台所へ行って、火をもやしたりして、食事の用意を始め、やがて美しい銀器に食物を盛^もって、主人の女にもこの男にも喰^くわせた。一体、この男がはいつた時に、門はちやんと閉めてかんぬきもしておいたのである。主人の女は、外界との連絡がないはずであるのに、主人の食物のみか、この男の食

物まで用意して持って来ているのである。合点がてんのゆかぬ事ばかりだが、お腹が空いているので、気にならないで、たらふく食べた。女も、男の手前など気にせず、思う存分たべている。食べおわると、女房らしい女が後片づけをして、皆連立って去った。すると、主人の女が、その男に門のかんぬきをさせてから、また二人いっしよに寝た。

四

その不思議な女と一夜をあかして、朝になるとまた門を叩く者がある。女は、男を開けにやった。すると、男女が三、四人やつ

て来たが、昨夜の顔かおづれ触ふとは全然違ちがっている。そして、家の中へはいるとしとみを上げ掃除そうじなどをして、かゆと強飯こわめしとを主人の女とその男に給仕した。こんな風にして、二、三日暮くっていた。男は、夢ゆめみ心地に女との愛欲生活をたのしんでいた。すると、女が何か外出する用事はないかと訊きいたので、ちよつとあると答こたえると、しばらくして一頭の駿馬しゅんめに、水干装束すいかんしょうぞくをした下人が二、三人付いてやって来た。

すると女は、男をその家の納戸なんどのような部屋へ案内した。外出用の衣裳いしやうが、いく通りも揃そろえてある。どれでも、気に入ったのを着ろという。男は、思いのままに装束して、その馬に乗り、下人を連れて外出した。その馬もいい馬だったが、下人達も後生大

事と仕えてくれるのであつた。帰つてくると、馬も下人も女主人に何ともいわれないのに、いつの間にか居なくなつた。このように、豊かに何の不自由もなく、二十日ばかり暮していた。すると、女がある日、不思議な御縁ごえんでいっしよに暮しましたが、あなたもお気に召めしたから、こんなに長くいらつしやるのでしよう。そうすれば、私のいうことは、生死にかかわらず聴きいて下さるでしょうといつた。男は、この生活にも相手の女にも心から魅みせられていたから、もちろんです、生かそうとも殺そうともお心次第です、と答えた。すると、女は大変よろこんで、男をいざと言つて、奥おくの一間へ連れて行つた。そして、この男の髪かみへ縄なわをつけて、はたもの（罪人を答打むちうちつたためにしばりつける刑具けいぐである）に男を後向

きにしばりつけた。両足もしっかり、むすびつけた。そして、女は男のように烏帽子えぼしを被りかぶ水干袴をつけると答をもつてはだかにした男の背を八十ばかり打った。そしてから、気持はどうですと
いって訊きいた。男は、何のこれしきのことと答えると女は満足して、いろいろといたわった。よい食物などもたくさんたべさせた。
三日ほどで、答のあとが、いえると、また同じ室につれて行って、
はたものにしてしばりつけると、今度は、前よりもしたたかに八十打
った。血走り肉乱れるほど、はげしい打ち方だった。

五

情なさけ容け赦ようしやもなく打ちつづけてから（我慢がまんが出来ますか）と、
 いつて訊いた。男は、顔色も替かえず（出来出来ますとも）と、答える
 と、今度は前よりもほめ感じて、いろいろ介かい抱ほうしてくれた。四、
 五日してから、また同じように打ってから、その次ぎには、背中
 でなく、腹の方を打った。

それにも辛しん抱ぼうすると、女はいろいろいたわってくれたが、十
 日ばかりして、答のあとがすっかり回復したころ、ある夜、女は
 男に水干袴と立派な弓、やなぐい、すねあて、わらぐつなどを与
 えて、装束つるうちさせてからいった。（これから蓼た中なかの御門みかどに行つて、
 そつと弦打つるうち（弓のつるをならすことである）をして下さい。す
 ると、誰だれかがそれに答えて弦打つるうちをするでしょう。そうしたら、口く

ちぶえ
笛を吹いて下さい。すると、またそれに答えて誰かが口笛を吹くでしょう。そして、人が寄つて来て「誰か」といつて訊くでしょうから、ただ「来ている」と、だけ返事をして下さい。そして相手の連中の行くところへいっしょに行つて下さい。そして、立っているところさまたに立っていて人などが出来て来て妨げさまたなどする場合はよく防いで下さい。仕事おわが了ると、舟岡山ふなおかやまの方へ引き上げて、そこで何か命令が出るでしょう。しかし、物を配分することがあつても、あなたは取らないで下さい。」

女は、こまごまと注意を与えてから、男を出してやった。

男が蓼中の御門へ行つて見ると、自分と同じような姿をした者が二十人ばかりいた。それとは別に、首領らしい男が一人離れて

立っていたが、色白く小柄な男であるがこの男の前に皆畏つて
いた。外ほかに、手下らしい下人が二、三十人ばかりいた。そこでいろ
いろ命令を出してから、皆打揃つて京の町へ入つてある大きな家
を襲おそつた。その前にその近所にある目ぼしい援兵えんぺいでも出しそう
な家に対して、二、三人ずつ人を分けて警戒けいかいさせた。その男も、
その警戒の人数の中に加えられた。残りの人数は、みな目的の家
に押し入つた。その男が、警戒していた家からも、物音をききつ
けて、得物えものを持って四、五人走り出ようとしたのを、男はよく戦
つて射すくめてしまった。

その家の品物を盗み^{ぬす}了ると、一行は舟岡山へ引き取つてそこで品物を各自に分配してくれたが、その男は女に云われた通り、自分は見習いのためについて来たのだから、物はいらないと云つて、辞退した。すると、首領らしい男はなるほどと云うように、うなずいていた。

そこで、解散したが、男が家に帰つて見ると、湯などわかしてあり、食物も用意してあつて、歓待してくれた。こんな生活をしている内に、男はだんだん女がいとしく別れがたくなつて、自分が悪事を働いているということさえ、気にならなくなつた。そして、五度十度と仕事に加わつた。刀を持つて内へ押入^{おしい}る組になつ

たり、弓を持って外で立番する組にもなった。どちらの組に加つても、相当な働きをした。すると、女がある日、一つのかぎをくられて、鳥丸からすまより東、六角より北のこういう所に行くと、蔵が五つある。その蔵の南から二番目のを、このかぎで開けなさい。いろいろ品物がはいつているから、その中で気に入つたものを運んでいらつしやい。その近所には、かし車屋があるから、それを頼たのんだがよいと云つた。云われる通りの蔵を見つけて開けて見ると、ほしいと思うものが、充じゆうまん満まんしていた。それを運んで来て、平生使っていた。

こんなにして、一年以上過ぎた頃である。その女がある日、いっつになく心細気な顔をして涙なみだぐんでいる。どうしたかといつて訊

くと、（あなたと本意なく別れるようになるかもしれない）と、云うのである。どうして、今そんな事を云うのかときくと（いや世の中と云うものはそうしたものである）と答えた。男は、ただ口先だけで云うことだとあまり気に止めていなかったが、それから数日して、例のように供人を連れ、馬に乗って外出した。外出先で一泊して、あくる日帰ろうとすると、いつの間にか馬も供人も居なくなっている。おどろあや驚き怪しんで家に帰って見ると、その家は焼き払はらわれて、三人の女は影かげも形もない。六角の北の蔵の所へ行って見たが、その家もすっかりとりこわされていた。男は初めて女のいったことが思い合わされた。その後、男は結局習い覚えた強盗を働いて世を送っている内、捕とらえられて、この話を白状した

のである。その男がつけ足していうには、あの小男の首領らしい男は結局自分が連れ添そっていたあの女であつたらしい。同棲どうせいしていた当時は、お互たがいにその事には、一言もふれなかつたが、後で考え合わせると、そうらしいというのである。

青空文庫情報

底本：「悪いやつのお話へちくま文学の森8」筑摩書房

1988（昭和63）年8月29日第1刷発行

底本の親本：「筑摩現代文学大系 27 菊池寛・広津和郎集」筑摩書房

1977（昭和52）年10月

初出：「新大阪新聞」

1947（昭和22）年

入力：内田いつみ

校正：noriko saito

2009年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女強盗

菊池寛

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>